



園だより 11月号

新宿区立西戸山幼稚園 令和6年10月30日発行



腐葉土とミミズ

園長 佐藤 淳穂

畑には欠かせない「腐葉土」。この腐葉土を園庭の落ち葉で作ってみようと思い立ったのは去年の冬でした。

腐葉土は、落ち葉がミミズや微生物、バクテリアなどによって分解・発酵されて土状になったものです。野菜を育てる際には、黒土と腐葉土を2対1くらいの割合で混ぜて畑を作ります。腐葉土を混ぜることで、苗床の水はけがよくなり、不要な老廃物や雑菌が流れて病気を防ぐことに役立ちます。また、土だけでは水を含む毎に粘土質がどんどん硬くなってしまいますが、腐葉土が混ざっていることで土壌の柔らかさが保たれ、野菜の根が十分に伸びて栄養分をしっかりと吸収できるようになるのです。

12月のこと、腐葉土の原料がブナやコナラ、クヌギなどの広葉樹の葉と知って、「どんぐり（コナラ）の葉でも作れるかもしれない」と落ち葉を集めることにしました。どっさり山積みになった落ち葉を踏んだり撒いたりして遊んだ後、子どもたちに黒いビニール袋に入れてもらいました。発酵を促がすための少々の米ぬかと水も入れて口を縛り、陽の当たる場所で保管しました。

そして、とうとう自家製の腐葉土を使う時がやってきました。運動会が終わり、冬の畑の準備をするのです。落ち葉を集めてから春、夏、秋と季節が過ぎました。すみれ組の何人かは黒いビニール袋に見覚えがあった様子でした。袋を開けて、中を覗きました。「なんか、本のおいがする！」とAさんが言いました。確かに、古本はこんなにおいがする気がします。「におい」を探究したら、本と腐葉土の共通点が見つかるかもしれません。

今回は自家製の腐葉土を使うとあって、いつもの土づくりとは我々の意識は全く違っていました。園庭のどんぐりの葉だと思えば腐葉土が愛おしく、子どもたちも何かを感じようとしていました。

そんな時、「ミミズがいる！」やっぱ虫が出てきました。「ミミズがいる土はいい土なんだって」「そうだよ。ミミズの糞が栄養なんだよ」「土に戻して」子どもたちの心が動き、発言が飛び交います。やはり生き物の存在感は大きく、腐葉土への関心は吹き飛ばされたようでした。「ミミズを飼いたい」Bさんが言いました。ところが、「ミミズは畑に必要なだから、土から出さないで」というCさんと意見が対立してしまいました。するとDさんが「栄養はミミズの糞だから、糞だけを土に戻せばいいんじゃない？」と言ったのです。子どもの鋭い発想に驚きました。

この後、すみれ組はいったいどうするのか…。ミミズの糞を見分けることができるのか。この真剣なやりとりの中に、科学につながる問いや問題解決力などたくさんの学びが潜んでいる可能性があります。自前の腐葉土で野菜が実り、園の自然の循環や命の巡りを実感できる日まで、わくわくが続きます。